

 おはようございます！今日は、中国貴州省、苗（ミャオ）族に伝わる民話をお話しします。貧乏な牛飼いと天の織姫の話。

天の織姫が地上に降りてきて水浴びをしているときに、織姫が天に帰る時に必要な、羽でできた扇を牛飼いが隠してしまいます。天に帰ることができなくなった織姫は、牛飼いと結婚して、息子が生まれ幸せな生活を送っていました。ある日、織姫に扇の隠し場所を知られてしまいます。

地上での一年は天上の世界では一日にあたるようで、織姫はもう三日も天上に帰っていないことになり、織姫のお父さんⅡ天帝を恐れた織姫は、泣く泣く牛飼いや子どもを地上に置いたまま、天上に帰ることになります。

織姫は息子に向かって、「お母さんはおばあさんの家に帰ります。お前は武芸をしつかり身につけなさい。おじいさんを倒すことができますれば、また一緒に暮らすことができますから。」と言い、天上に帰ってしまいました。

牛飼いは毎日空を見つめて、ため息ばかり。見かねた牛が牛飼いと息子を背中に乗せ、さつと天に昇り、宮殿のそばで二人を降ろします。なんだかロケットのような牛さんですね。

織姫は牛飼いと息子を見つけると大喜び。おばあさん（織姫の母）も天女たちも大歓迎。

ただ、天帝だけは別でした。何とかしてこの牛飼いをやつつけてやろうとして、色々と試します。

まずは市場に牛飼いを連れて行って迷わせ、二度と宮殿に帰れぬように仕向けます。織姫は前もって牛飼いにたくさんの鶏の羽をもたせ、分かれ道を通るたびに羽を落とすように教えます。帰り道、落としてきた羽が鶏に変わり、宮殿までの道を教えてくれたので、牛飼いは難なく宮殿に帰れました。

次に天帝は、山仕事に牛飼いを連れていき、大きな太い木の皮を削るように命じます。それを聞いた織姫は、「きつと役に立つから」と、長い布を牛飼いの頭に巻いてくれました。

牛飼いは木のとつぺんの方から皮をむき始め、気が付くとはしごが外されていて、天帝はいなくなっていました。天帝は牛飼いを木の上で飢えて死ぬか、落ちて死ぬように仕向けたのですが、牛飼いは織姫が頭に巻いてくれた布のことを思い出し、それを枝に結び付け、スルスルと布を伝って降りてきました。

天帝は今度こそはと、牛飼いを山焼きに連れて行って焼き殺そうとします。それを知った織姫は牛飼いに大きなカニをとってこさせ、大きなひょうたんの水とカニを入れて持って行かせました。カニの掘った穴にヒョウタンの水を注ぐと、あら不思議、池になりました。その池につかいていて火が収まるのを待ち、牛飼いはまた助かります。

そうこうするうちに、織姫と牛飼いの間には女の子も生まれました。これを機に、天帝は牛飼い一家を地上に帰らせると言い出し、

お別れのパーティーを開きます。天帝はお酒を牛飼いに勧め、それを飲み干した牛飼いはバツタリと倒れ、死んでしまいます。そうです。お酒に毒が入っていたのです。

その後、織姫は木の棺に牛飼いのなきがらを納めると、頭の所に雄鶏を入れて、ふたをせずに川に流します。雄鶏が「薬持ってください。」と鳴くと、たくさんの川の魚が跳ね上がった棺の中に入り、牛飼いの毒をみな吸い取ったおかげで、牛飼いは生き返ります。けれどもこの時から川の魚の肝は、毒のために苦くなったのだとか…。

牛飼いは宮殿に戻り、天帝に自分たちを地上に帰すようにと詰め寄ります。天帝は凶暴な本性を現し、牙をむき、爪を立てて牛飼いに襲いかかります。と、その時です。牛飼いの息子が弓を構えるが早い、天帝の両目を射抜いてしまいました。この時、粉々になった天帝の目が天の星になり、天帝の悲鳴が雷になったのだそうです。

銅の太鼓（銅鑼Ⅱどら）の中に入って無事地上にスルスルと降りてきた牛飼いの一家。季節は秋のとり入れの時期でした。苗族の人たちは収穫のお祝いと幸せな牛飼い一家を記念して、銅鑼やアシの笛を吹いて今でもお祭りをしているのだそうです。

今日は七夕。七夕の「織姫と彦星」の話にそっくりだけれど、違う民話をご披露しました。（立教小学校校長 田代 正行）